素直にアイムソーリー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
素直にアイムソーリー

【Ｎコード】
Ｎ６５０７Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
急に怒りだした彼女。けれどすぐにそれは。チェッカーズシリーズ第五十六弾、この曲は本当に名曲でした。

第一章

素直にアイムソーリー

「えっ！？」
僕は彼女の今の言葉に思わず声をあげた。
「今何て？」
「だから帰るの」
彼女は口喧嘩の末にこんなことを言い出したのだ。
「一人でね」
「一人でって」
「帰るって言ったら帰るの」
強情に言ってきた。
「もうね。一人でね」
「帰るって。何でそんなことを」
「いいから降ろして」
有無を言わせぬ口調だった。
「降ろしてよ、家に帰るから」
「家に帰るっていっても」
今ははじめてドライブする場所だ。それでこんなことを言ってもだった。何を言っているんだまた、これが今僕が心の中で思って呟いた言葉だった。
「どうやって帰るつもりなんだよ」
「そんなことはどうでもいいの」
これこそまさに暴論だと思った。
「だから早く」
「歩いて家に帰るっていうのかい」
「そうよ」
助手席から口を尖らせて言ってきた。
「わかったわね。それじゃあ」

「ああ、わかったよ」
呆れ果てながらもその言葉に応えた。
「帰るんだね」
「そうよ、帰るの」
ドライブの帰り道のところで下らない理由で口論してその結果こんな状況になった。僕としても内心何て下らないと思いながらも応えていた。
そして。僕は遂に助手席のロックを外した。そのうえで彼女に言った。
「これでいいんだね」
「そうよ、それじゃあね」
「全く」
こう言って彼女が出て行くのを見てだ。溜息と一緒に扉を閉めた。見れば俯いた顔で唇を噛んでそこに立っている。やれやれと思いながらそれで車のエンジンをかけるとだった。
彼女の目に涙が滲んできた。そして泣き出してきた。そのまま大声で泣きだした。
その彼女を見て僕は助手席の扉を開けた。それから声をかけた。
「あのさ」
「何よ」
「中に入る？」
こう声をかけた。
「車の中に」
「車の中にって」
「悪かったよ」
僕からの言葉だった。
「だからさ。仲直りしよう」
「仲直り？」
「そう、仲直りしよう」
こう彼女に言った。

「君さえよかったら」
「仲直りって」
「しよう」
僕から謝った。実は帰り道なんて全く知らない。その彼女への言葉だ。
「それでいいよね」
「・・・・・・ええ」
ここで彼女も遂に頷いてきた。
「それじゃあ」
「入って」
あらためて車の中に入るように言った。
「帰ろう、家にね」
「ええ、それじゃあ」
こうしてまだ泣いている彼女を車の中に入れて出発した。これはいつものことだ。
別の日は留守電に。怒った声が入っていた。
その怒った声を聞いてまた溜息だった。
「また喧嘩か」
ここでもやれやれだった。
「本当に。どうなのかな」
そうは言ってもだった。放っておけなくて彼女の部屋まで行って鍵を開けて。それで中に入るとだった。椅子にもたれてそのまま寝ていた。

第二章

泣き疲れて寝たらしい。瞼が腫れている。何でそうなったのかもう理由はわかったいる。
苦笑いと一緒に溜息を出して声をかける。すると。
「えっ！？」
「起きた？」
ゆっくりと目を開けた彼女を見ての言葉だ。
「起きたかな、それで」
「何で？」
「何でって。怒ってたから来たんだけれど」
「嘘みたい・・・・・・」
僕の言葉には応えずに呆然とした声をあげた。
「こんなことって」
「こんなことも何もないじゃない」
「ないじゃないって」
「それじゃあ」
僕はそんな彼女にこう言った。
「御免ね、泣かせて」
「それは」
「何処かに行く？」
また彼女に言った。
「今から」
「ええ、じゃあ」
「何処がいいかな」
また彼女に問うた。
「好きな場所でいいよ」
「私の好きな場所に」
「うん、何処でもいいから」

瞼が腫れてしまっていても澄んだ顔になっている彼女への言葉だ。
「好きな場所を言って」
「有り難う・・・・・・」
こうしてこの日も僕が謝ってそれで仲直り。その日は彼女の好きな喫茶店に入った。可愛らしい趣味でも欲のない彼女らしい好みの店だ。
アンティークな内装のその店に入って紅茶とケーキを頼む。どちらも彼女の好きなものだ。それを御馳走してそれから話すのだった。
「寂しいのは嫌だよね」
「寂しいのは？」
「うん、嫌だよね」
微笑んで彼女に言った言葉はこれだった。
「それはね」
「ええ、そうね」
彼女はケーキと紅茶を前にして僕の今の言葉に応えた。
「それは」
「気まずいままで別れたその日は最悪だよ」
僕は今度はこう言った。
「全くね」
「全くなの」
「うん。全く」
また言った僕だった。
「本当にね」
「それは」
僕のその言葉を聞いてだった。彼女も気付いた様な顔になって言ってきた。
「私も」
「君もなんだ」
「ええ」
僕のその言葉にこくりと頷いての今の彼女の言葉だ。

「そうよ。それは」
「そうだよね。それが一番寂しいよ」
「本当にね」
「だからね」
僕は彼女に言ってあげた。
「一緒にいよう」
「私も」
そして僕の言葉を受けた彼女は微笑んでくれて。僕にまた言ってきてくれた。
「御免なさい」
「うん」
僕は勿論その言葉を笑顔で受けた。そのうえでキスをして仲直り。お互い素直になるのは難しいけれど素直に謝ったら。神様が御褒美をくれた。

素直にアイムソーリー　　完

２０１０・２・１８

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6507o/

素直にアイムソーリー

2010年11月2日02時41分発行